

# 職場における熱中症による死傷災害 平成31年1月15日速報値 全国版

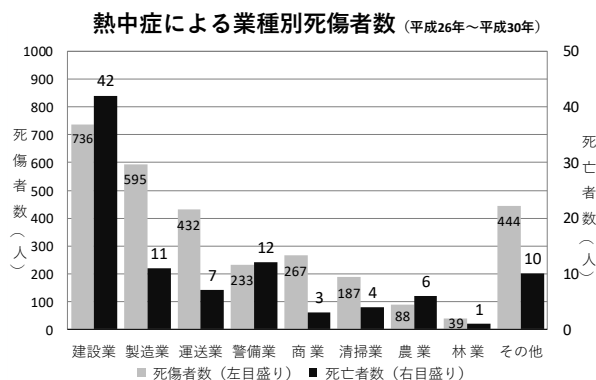
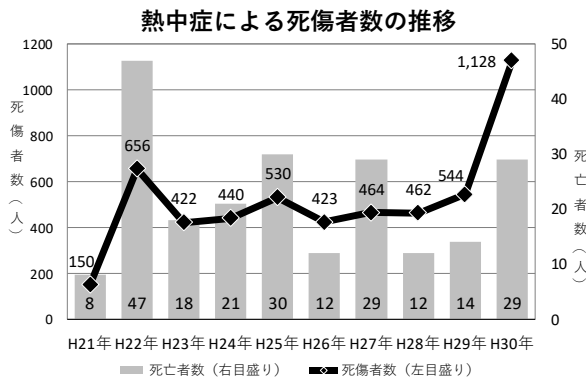
愛知労働局 労働基準部 健康課

## 熱中症による死傷者数の推移（全国速報値）

過去10年間（平成21年～30年）の職場における熱中症による死亡及び休業4日以上が発生件数（以下「死傷者数」という。）をみると、平成22年に656人を記録した後、長い間400人～500人台で推移してきました。

ところが、猛暑だった平成30年には一気に急増し、死亡者数29人、死傷者数1,128人と前年比倍増の過去最大にあたる件数に達しました。

平成30年7月23日午後2時過ぎ、埼玉県熊谷市で国内観測史上最高となる気温41.1℃が観測され、気象庁が緊急会見を開き「熱中症で命を落とす危険性がある。」「1つの災害と認識している。」と異例の注意を呼びかけたことも記憶に新しいと思います。



## 暑さ指数とは？

ところで、皆さんは「暑さ指数」をご存じですか？ 気温と同じ「℃」を単位にしているため逆に気温との違いが分からない方も多いと思います。どんな仕組みで「暑さ指数」が決まるかを大まかに理解しておくことで注意すべきポイントがわかります。

暑さ指数 (WBGT) とは、Wet-Bulb Globe Temperature の略で「気温」、「湿度」、「輻射熱」の3つ（正確に言えば風の影響も含みます）から決まります。

その影響の比率は次のとおりです。

暑さ指数 (WBGT) = 7 (自然湿球温度) : 2 (黒球温度) : 1 (乾球温度)

※ WBGT : 湿度、日射・輻射など周辺の熱環境、気温の3つを取り入れた指標

実は「湿度」の影響が最も大きく、次に地面や舗装道路、建物の表面等から遠赤外線熱線により伝わる「輻射熱」、最後に「気温」の順となっています。これを見ると重要なのは「気温」だけではないことがわかります。

## 熱中症防止のためには「暑さ指数」に基づく管理が重要

平成 30 年 7 月 23 日、国内観測史上最高気温 41.1℃を記録した埼玉県熊谷市における「暑さ指数」は午後 2 時で 29.5℃「**嚴重警戒**」、午後 3 時で 31.1℃「**危険**」でした。

気温とはかなり異なり意外に低いことが分かります。実は、これと同程度の「暑さ指数」は特別暑い地域でなくともしばしば観測されています。気温でなく暑さ指数に注目することがとても重要であることが分かります。

熱中症予防の指針においては「暑さ指数」28℃以上で「**嚴重警戒**」、31℃以上で「**危険**」とされています。

職場に WBGT 測定器を備える他、環境省の「**熱中症予防情報サイト**」の「暑さ指数(WBGT)の実況と予測」をチェックする等により「暑さ指数」に基づく管理を行いましょう。

「**熱中症予防情報サイト**」 URL : [http://www.wbgt.env.go.jp/wbgt\\_data.php](http://www.wbgt.env.go.jp/wbgt_data.php)

## 熱中症防止は事業者と労働者の協力

単に「暑さ指数」に注目するだけでは熱中症は防げません。様々な対策が必要となりますがその際、事業者と労働者の役割を明らかにしておくことが重要です。

**事業者側**は、熱への順化期間の確保、作業時間の短縮、休憩時間の確保、休憩場所や水分・塩分補給のための整備など根本的な対策を行います。

**労働者側**は、日常的な体調管理や異常を感じた際にすぐ申し出ることを意識するなど事業者には行えない対策に努めます。

これらは、どちらが欠けても十分でなく、協力して補完し合うことが必要です。

## 熱中症の危なさとお互に正しく向き合おう

熱中症防止を有効に行うためには、現状をより正しく把握することが必要です。そのため気温だけでなく「暑さ指数」に注目しましょう。

また「暑さ指数」を元に対策を進める際、事業者側、労働者側それぞれが役割を認識して労使一体となって取り組むことが重要です。

熱中症の危なさとお互に正しく向き合おう。

